

## ストーリー

# 大川小遺族と交流5年（その1） 刻まれし命、向き合う

毎日新聞 2016年3月6日 東京朝刊



大川小にある慰霊碑を清掃する加納美雄さん＝宮城県石巻市で、佐々木順一撮影

太陽も雪もない空が北上川をほの白く染めた1月末早朝、防寒着姿の父母7人が慰霊碑を清め、子どもの名が一人一人刻まれた石碑をめぐっていた。振り返れば宮城県石巻市立大川小の被災校舎がある。2011年3月11日に発生した東日本大震災の津波は、同小の児童74人と教職員10人を帰らぬ人にした。遺族は地区ごとに分かれて碑を清掃し、この日は六つの小さな命を失った福地地区が当番だった。

わが子2人を亡くした加納美雄（よしお）さん（41）の姿があった。地震発生3日後、捜索のため大川小に来て惨状を目の当たりにし、6年生の次女愛香（あいか）さん、2年生の長男悠登（ゆうと）君の死を覚悟した。2人の遺体が見つかって線香を上げに来た後は、5カ月に1度の清掃当番の日以外、訪れることはほとんどない。「ここに来ると子どもの存在を感じるという遺族もいるけど、自分はどうしても、ここにはいない気がして」。被災校舎を見ようとはしなかった。

私が加納さん一家と会ったのは地震から5日後の3月16日。その2日前、北上川を小舟で戻ってきた大川小の遺族夫婦に「あの状況では遺体が見つかれればいい方」と聞かされた。夫婦の家の向かいに住んでいたのが加納さんだ。訪ねると、母たき子さん（66）が孫の写真を手にも涙ながらに思い出を語ってくれた。

加納さんは消防団の捜索活動に忙しく、会えたのは4月の上旬だった。たき子さんに聞いた話を記事にして、掲載紙を渡すと、表情は険しかったが「書いてくれてありがとう」と言葉が返ってきた。加納さんの温かさに甘え、その後、幾たびと自宅にお邪魔するようになった。

震災直後の状況や捜索の様子を教えてもらったことはある。だが、この5年間、わが子への思いは聞けなかった。「気持ちを抑え込んでいる」と加納さんを心配する人もいた。慰霊碑を清掃した夜、私は加納さん宅の2階にある客間で向き合い、尋ねた。頬を伝う父の涙を初めて見た。〈取材・文 百武信幸〉〈6面につづく〉

## ストーリー

# 大川小遺族と交流5年（その2止） 41歳父、涙の追憶

毎日新聞 2016年3月6日 東京朝刊



居間で家族だんらんの時を過ごす加納さん一家。（左から）美智代さん、美雄さん、愛美さん、たき子さん、正治さん＝宮城県石巻市福地で、百武信幸撮影

<1面からつづく>

◆津波の大川小 救えなかった命

### 秘めた思い、切々と

2011年3月11日。団体職員の加納美雄（よしお）さん（41）は、宮城県石巻市の三陸自動車道河北インターチェンジにさしかかる頃、地震に遭遇した。電線が切れるほどの激しい揺れ。北上川の河口から約10キロの福地地区に自宅があり、その下流、海から約4キロの石巻市立大川小に次女愛香（あいか）さんと長男の悠登（ゆうと）君がいるはずだった。職場へいったん戻り、夕刻、大混乱した道を避けながら自宅へ車を急がせた。

最初に思ったのは家つぶれたかということ。携帯電話はつながらず、午後3時過ぎに会社の事務所の緊急電話から電話したら、家につながった。その時も「家は平気か、おじいさんおばあさん大丈夫か」と聞いただけ。小学生の子どもたちは学校にいるから大丈夫としか思ってねえから。まさか、あれだけ大きな津波が学校に来ると思ってねがった。

家に帰ると、父正治さん（72）と母たき子さん（66）、妻の美智代さん（46）、中学生だった長女愛美（まなみ）さん（19）がいた。下の子2人の姿は見えず、誰ともなく「子どもたち帰ってきてねえんだ」とつぶやいた。自宅には海の近くにある家に帰れず、福地地区に避難してきた人たちも身を寄せていた。地震発生時、公務で学校を離れていた大川小の用務員に「きっと、みんなで安全な所に逃げていますよ」と励まされた。

北上川を遡上（そじょう）した津波は方方で堤防を破壊し、大川小へ向かう道は浸水していた。加納さんは消防団の活動に加わり、地区の入り口で交通整理をしていて12日を迎えた。朝日を頼りに川沿いを車で進むと、大川小の手前にある大川中で、校舎の3階付近から助けを呼ぶ声が聞こえた。浸水していて近づけず、応援を呼ぶため大慌てで福地地区へ引き返した。

子どもたち寒くねえべかってそれだけが心配で。この頃の記憶はあいまい。ただ、「子どもたちはヘリコプターで帰ってくる」という話を聞いて、お母さん（妻）と「こんな時しか乗れないから悠登たちきっと喜ぶべな」なんて話した。

事態が一変したのは12日午後だった。先遣隊として大川小に向かった消防団の先輩から気遣うように言われた。「厳しいかもしれない。覚悟した方がいい」。だが、加納さんは自分の目で現場を見ていない。助かっている可能性はまだあるとも思え、家族に伝えるべきか迷った。その数日後に家族へ伝えたと、加納さんは記憶している。一方、美智代さんは12日午後、自宅の外で夫からこう言われたと記憶している。「今帰ってこねえってことはそういうことだ。あきらめろ」。美智代さんは絶句し、泣き崩れた。

その日のことだったか、学校から山を越えた公民館にたどり着いた大川小の児童の名前が書かれた名簿を見た。うちの子の名前はなかった。生きていうかすかな希望は、どんどん小さくなっていった。

14日。加納さんは缶ジュースを詰めたリュックサックを背負い、消防団の仲間とともに大川小へ向かった。「きっと裏山だ。山さ捜そう」。決壊した堤防を迂回（うかい）し、1時間以上かけて山側へ回った。学校のある釜谷地区を眼下に見下ろし、ここでは誰も助からないと直感した。校舎の反対側から裏山を登っていくと、残雪に血痕があった。生存者がいたのだろうが、誰とも出会わないまま学校近くに下りた。

校舎の周りは洗濯機でぐるぐる回したようにがれきが積み重なっていた。みんなパニック状態で、遺体見つかってよかったなって会話をしている。あちこちで遺体の掘り出しに手を貸してくれと言われ、手伝った。自分の子の捜索を言いだすところでねがったし、考える余裕もねがった。その方がよかった。

次女愛香さんと長男悠登君の遺体は校舎周辺で見つかった。検視に時間がかかり、遺体はなかなか家に帰ってこなかった。

引き渡された2人はきれいな顔をしていた。何とか手に入ったひつぎの中に、子どもたちが一緒に過ごせるよう勉強道具をほとんど入れて送り出した。時々、捜索していた時のことや遺体が並んだ安置所の風景を夢にみる。怖いとかではない。遺体で寝かせられたまま、なかなか戻してもらえないのがもどかしく、もどかしく、やりきれなかった。

11人の子供が仲良く並んで笑っている写真がある。地震の1年半前、南三陸町の海辺であった福地地区恒例の夏キャンプの写真だ。6人の子供が亡くなった。遺族から子どもの話を聞いた私は、写真を見る度に、この子たちが元気だった頃を知っているような錯覚に陥る。

愛香さんはおとなしくて字が上手。1週間後に控えた卒業式で、同級生の佐藤みずほさんとピアノを弾くはずだった。5年生の紫桃千聖（しとうちさと）さんも大の仲良しで、卒業までの時間を惜しむように3人はおしゃべりしていた。勉強も運動も得意な3年生の今野誠



東日本大震災前、福地地区恒例の夏のキャンプで仲良く集合写真に納まる子どもたち  
=宮城県南三陸町で、加納さん提供

君は同級生のあこがれの的。寝るときは枕元にヘルメットを準備するしっかり者だ。愛香さんの弟の悠登君は体は大きくてもものんびり屋。甘えん坊で乗り物が大好きだった。2年生の佐藤来旺（らいお）君は弟の面倒を見て、みるみるお兄ちゃんらしくなっていた。

## 立ち止まっていられない

東日本大震災が発生した時、東京本社 of 地方部に所属していた私は、先輩記者と社有車に相乗りして東北に向かった。福島県相馬市に着いたのは翌朝。津波の被害を取材した後、福島市などを經由して13日午後仙台市へ入った。14日、情報がほとんどなかった石巻市の半島部・雄勝方面に向かう途中、北上川で出会ったのが大川小の遺族だった。それから、1度の帰京を挟んで4月末までの約30日間、石巻市を中心に取材した。



東日本大震災の津波で児童74人と教職員10人が犠牲になった宮城県石巻市立大川小  
=宮城県石巻市で、佐々木順一撮影

児童108人中74人が死亡・行方不明となり、教職員10人が死亡した大川小。教師が避難対応を協議する間、児童は校庭に約50分待機していた。近くの裏山ではなく、新北上大橋のたもとの方へ避難を始めた直後、津波に襲われた。私は、津波が押し寄せる直前に保護者が迎えに来て助かった児童や避難を呼びかけた市職員の証言を集め、また、裏山に登ってみるなどし、2度の検証記事の取材にかかわった。その年の5月に宮崎へ転勤した後も福地地区を訪ねた。

「遺族に寄り添ってきた」とはおこがましくて、とても言えない。時間をともにさせてもらうことで私自身の気持ちが落ち着いた、というのが正直な思いだ。遺族が少しずつ笑顔を見せ始めることに安心感も覚えたが、何よりも「当たり前 of 日常」が突然消えてしまう無常感と、幼い子にも容赦なく襲いかかった自然の無情さに、心に穴が開いてしまったようだった。そんな時、遺族の言葉に耳を傾けていると、悲しみの向こうにある「生きる意味」を一緒に考えることができたような気がして、私の方が救われた。

加納さんの家にはペンを持たずに訪ねた。酒が入ると、学校の避難行動を巡って、加納さんと父正治さんは口論した。「先生はどうして山に逃がしてくれなかったのか」と悔やむ正治さんを、加納さんはいつも「先生も一生懸命だった。誰も責めることはできない」といさめた。



時折実施される消防団の活動で行方不明の児童や住民を捜す以外、加納さんは大川小から距離を置いた。市が設置した第三者検証委員会や児童23人の遺族が起こした裁判も静かに見守っていた。「自分は(子どもを)迎えに行かなかった。そこまで危険とっていなかった」。そう繰り返す加納さんに、私は親しくなればなるほど胸の内を聞けなかった。

地震があった年の秋、加納さんからお米が届いた。田んぼは津波被害に遭わず、無事に育った。5月の田植えの時に「立ち止まってははいられない。きっと子どもたちもそれを望んでいないから」と話していたことを思い出した。お米の一粒一粒が、加納さんがこらえている涙のように思えた。翌年7月には夫婦で私が勤務する宮崎に来てくれ、日向灘に面した鶴戸(うど)神宮で一緒に手を合わせた。

14年春、私は仙台勤務の希望がかない、15年に石巻へ戻った。震災後の5年は福地地区の人々や加納家と過ごした5年という思いが強い。今まで聞けなかった父としての思いを加納さんに聞きたかった。そのことを率直に伝えると、加納さんはとつとつと、地震発生時に思ったことや大川小を捜索した時の詳細な様子を初めて話してくれたのだ。

「あの時、全てを投げ出して迎えに行けば、助けられたのか」と加納さんは言った。海岸から大川小まで約4キロ。福地地区はさらに約6キロ内陸にある。保護者が学校まで迎えに来て助かった子どももいる。「あの時迎えに行けば……、でもそれができなかった」。後悔を口にすれば、自分より学校の近くにいた両親をさらに悔やませてしまう。学校に大津波が来るとい危機感が、あの時の自分になかったという自責の念にも襲われる。「自分が泣けば、家族がしんみりするから泣けない」

子どもたちが夢に出てきますか、と聞いた時のことだ。「最近は何とも出てこない。でも、見る時は今も同じ。普通に一緒にご飯食べている。やっと会えたんだけど、ああ、またいなくなるんだ、というのが心のどこかで分かっている……」。言葉が途切れた。取材ノートに落としていた目を上げると、涙が頬を伝っていた。「だから……、声をかけられない」。懸命に言葉をつないだ加納さんの目から、こらえかねた涙があふれ出した。

東日本大震災から間もなく5年。福地地区の遺族はそれぞれの道を歩む。6年生だった佐藤みずほさんの父、敏郎さん(52)は講演活動に奔走し、防災の必要性和命の大切さを訴えている。5年生だった紫桃千聖さんの両親は裁判であの日の真実に迫ろうとしている。佐藤来旺君の弟巧基(こうき)君(8)は兄と同じ大川小の2年生になった。加納さんの長女愛美さんは仙台の大学に進み、週末は帰郷して家族で過ごす時間を大切にしている。「向き合い方は人それぞれ」と加納さんは言った。

1年前の3月、酒を飲んでいた加納さんが被災校舎を見たくない理由を漏らしたことがある。「子どもたちにはずっと申し訳ないと思っている。自分はいれを見る限り、忘れられない」。学校の避難行動を巡って正治さんと口論もするが、「最後は話すことをあきらめるといのか、そうじゃいけないと思うんだけど」とつぶやいた。

歳月の流れは、加納さんの表情を少し和らげたようにも感じていた。それでも、あの涙を思い返す時、私自身も震災直後に引き戻されたような胸の痛みを覚える。時間が過ぎて癒える悲しみもあれば、大切な2人と過ごした日から遠ざかることで記憶がおぼろになり、募るさみしさもある。「この思いは変わらない。たぶん一生続く」

加納さんは「自分にとっては、田んぼが子どもたちを育てる代わりになるのかな。お米は命とつながっているから」とも言う。涙と思って味わったお米は悲しみばかりではない、愛情も注がれている。加納さんの家族はそうして実った結晶を食卓でかみしめ、亡くなった2人の子どもとともに生きていくのだろう。もうすぐ家族総出の田植えの季節だ。加納さんの家の倉庫では今、新しい苗の準備が始まろうとしている。

◆今回のストーリーの取材は

## 百武信幸（ひやくたけ・のぶゆき） （宮城県石巻通信部）

2005年入社。秋田支局、東京地方部、宮崎支局、仙台支局を経て15年1月から現職。東日本大震災で被災した宮城県石巻市、東松島市、女川町を取材。震災発生直後に訪れた石巻市で大川小の遺族と出会い、交流を続けている。



取材する百武記者

ツイッター（@mainichistory）発信中です。ストーリーの掲載日に執筆者の「ひと言」を紹介しています。